

Dangling Man における視点と身体的所作の力学

幸山, 智子
九州大学人文科学府

<https://doi.org/10.15017/24662>

出版情報 : 九大英文学. 54, pp.71-87, 2012-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

Dangling Man における視点と身体的所作の力学

幸山 智子

序

知性派、衛学的。Saul Bellow につきまといがちな印象である。移民であること、ユダヤ人という民族的マイノリティに属していることなどから、先行研究においては Bellow の（ひいては、彼の作品中の人物たちの）アウトサイダー/観察者としての視点が注目を集めてきた¹。アウトサイダーとしての視点は物事をあくまで客観的に見つめるまなざしであり、視点の角度転換によって「見る主体」としての個の責任を一旦留保するものであるため、知的かつ静的なまなざしであると言えることができるだろう。このようなまなざしへの着目が Bellow の知性派作家としての地位を確固たるものにしてきた要因のひとつであると考えられるが、それは同時に、Bellow 作品の衛学性を強調することにも必然的につながってきた。もちろん、そういったまなざしが Bellow に人間の本質を見抜く明晰な視点をもたらし、長期にわたってアメリカ社会を鋭い筆致で描きつづけることを可能にした事実も明らかであり、本稿はその功績を否定するものではない。しかし、彼の視点にはマイノリティ文学にありがちな二分法——自分と同じ人種に属する「我々」と異なる人種である「彼ら」を区別し、そのふたつの比較の中で「我々」の実情を暴露したり、「彼ら」を糾弾したりする描き方——に陥らないダイナミックな視座、

¹ James Atlas は Bellow のアウトサイダーとしてのものの見方に繰り返し言及している。例えば、“Bellow never rid of himself the suspicion that he wasn’t quite part of America.” (Atlas 50)と述べている。

自他の境界を双方向から取り払おうとする動きが見受けられることを特に主張したい。

もとより Bellow にとって、他者の視線と向き合うことは避けがたく、とりわけ「ユダヤ系作家」という枠組みにとらわれず、アメリカの文壇に受け入れられる作品を創作していく上では差し迫った問題であった。大学院で英文学を専攻したいという Bellow の希望を、ノースウエスタン大学英文科の学科長であった William Frank Bryan が「ユダヤ人には英文学の伝統を理解するために必要な感性 (“the right feeling”) が備わっていない」という理由で拒絶したエピソードは批評家のあいだではよく知られている (Atlas 54)。このことから、Bellow にとって他者の視線とは、主体的な意識の持ちようにかかわらず容赦なく浸透し、自己を解体しようとするものとしての側面を持っていたことが推し量られる。まさにそういった他者のまなざしにさらされる緊張感の中で発表されたのが処女小説 *Dangling Man* (1944) なのである。この作品の主人公 Joseph は移民系のユダヤ人と設定されるなど、作者 Bellow の伝記的要素を多分に共有した人物である。作者自身がそのキャリアの初期において抱いていた他者の視線への意識やアメリカの文壇に認められる過程で生じる宿命的な葛藤・審美的態度が、Joseph の視点に投影されているとしても不思議はない。確かに *Dangling Man* は視点が固定されがちなテーマ・形式を扱っていると言える。この小説で Bellow は第二次世界大戦中の抑圧された人間の孤独な心理状態を克明に描き出すばかりでなく、その手段として一人称の独白を主とする日記形式を用いているためである。しかしながら本稿の第一節においては、Joseph の分身が出現するまでの視点の動きを分析することによって、彼の視点は固定されたものではないことを明らかにする。

さらに、第二節においては、非私の感覚によって解体される主体のイメージが身体的な次元でも生起していることを主張する。後の作品においても言及されるように、幼少期に入院を経験したことは Bellow にとって原体験とも言えるものであることから、彼は身体感覚に関しては意識的であったはずであり、決して知性の力だけを駆使した作家ではなかったと考えられる。

Owing to the TB I connected breathing with joy, and owing to the

gloom of the ward I connected joy with light, and owing to my irrationality I related light on the walls to light inside me. (*Humboldt's Gift* 65)

この一説は、Bellow の伝記を書いた James Atlas によると Bellow が幼少期の入院体験をもとにして描いた箇所であり (Atlas 16) 特定の空間 (部屋) と人間の身体とが呼応しているような感覚が、幼少期の入院によってもたらされたものであることの証左になりうる。Bellow 作品においては、しばしば閉鎖された空間に死のイメージが重ねられるが²、死の状態が窓のない閉鎖された部屋であるならば、生の状態とはつまり、窓のある明るい部屋ということになる。さらに、特定の空間 (部屋) と人間の身体との呼応をふまえると、部屋の「窓」とは身体に穿たれ外界に開かれた穴、すなわち目、耳、鼻などの感覚器官であるとも考えられる。*Dangling Man* は能動・受動の差異はあるにせよ、部屋を出るといふ身ぶりに始まり、同じ身ぶりをもって終わる物語である。2月5日付けの日記の中で Joseph 自身が回想しているように、彼の中で自分や世界への違和感が生じたきっかけは以前住んでいた部屋を追い出されたことであるが、これは小説の結末において彼が現在住んでいる部屋を出て行く決心をしたことと相似を成しているのだ。この点において、*Dangling Man* は表立った動きのない静的な作品であるようであり、実は動的な要素が無視しがたく絡み合った作品であると言える。したがって、作品中に描かれる身体的所作を分析することによって、身体感覚を通じた自己解放が浮き彫りになると考えられる。非我の感覚によって解体されてしまう恐怖を、創造的な気分へと昇華させる柔軟性を持った主体。これこそが本稿で明らかにしたい Joseph の姿である。

² 例えば、*Henderson the Rain King* (1959) においては窓のない部屋と死の呼応関係が以下のように描写されている。“The last room of dirt is waiting. Without windows. So for God’s sake make a move, Henderson, put forth effort. You, too, will die this pestilence. Death will annihilate you and nothing will remain, and there will be nothing left but junk” (*Henderson the Rain King* 40).

客観的な視点と主観的な視点とはそれぞれどういった視座であるか。本論に先立って、このことをまず明確に定義しておく必要がある。心理学者 William James は「温感」「冷感」の概念を用いて主観性と客観性について以下のように説明している。

And this it is, finally, that Peter, awakening in the same bed with Paul, and recalling what both had in mind before they went to sleep, reidentifies and appropriates the “warm” ideas as his, and is never tempted to confuse them with those cold and pale-appearing ones which he ascribes to Paul. As well might he confound Paul’s body, which he only sees, with his own body, which he sees but also feels. Each of us when he awakens says, Here’s the same old self again, just as he says, Here’s the same old bed, the same old room, the same old world. (James 334)

自分自身にまつわる事象には「温感」すなわち親しみを感じる一方で、非我の感覚に対しては「冷感」すなわちよそよそしさを感じるのである。とするならば、アウトサイダーとしての客観的な視点とは、主体としての責任を一旦留保し、関与したり巻き込まれたりすることなく事象を眺める「冷たい」ものであると言えよう。つまり、アウトサイダーとして物事を観察するということは、知性の力によって視点の角度変換を行い、受け入れがたい自己の側面や現状を自己外部に隔離することである。必然的に、「見る主体としての自己」と「見られる客体としての自己」とのあいだには隔たりが生じる。James はさらに、“narrow people”と“sympathetic people”とを区別し、前者が自我のまわりに塹壕をめぐらせその中に収縮する一方で、後者は拡張と包含を志向していると述べている（James 312-13）。これらの考えと、「温感」「冷感」の概念とを組み合わせると、“narrow people”が冷たい非我の感覚を自己外部に隔離したままにしておくところを“sympathetic people”にあってはいわば「温め

なおし、自己内部に取り込むと考えられる。自己と他者との境界を打ち壊そうとする動的な視点は、後者の視点において見られるものである。

Dangling Man において Joseph が自分のものではない、つまり「冷たい」他者の声を「温めなおし」、内在化する過程は、Mikhail Bakhtin の理論を援用することによって前景化する。以下は、Joseph の 12 月 22 日付けの日記からの引用である。

I was aware that this had made a bad impression on Myron, but cared to do little to rectify it beyond explaining in a few short words that *I had not been myself lately*. But I did not say this until we had come to our second course in another restaurant. I became very quiet. I did not, and still do not, know where this out break came from. *I suspect that it originated in sheer dishevelment of mind*. But how could I explain this to Myron without becoming entangled in a long description of the state I was in and its causes? *I would make him squirm and I myself would squander my feeling in self-pity.* (22, 強調は引用者)

この箇所は、徴兵を待つあいだの一時的な仕事を紹介してくれるという友人 Myron Adler の前で失態を犯してしまった際の Joseph の独白である。この場面において、Joseph は絶えず Myron の視線に注意を払っており、自分の現状が友人を気まずくさせるものであることを自覚している。そして、Myron を含む他者から馬鹿にされるのではないかという懸念のために、失態を犯した理由を説明できずにいる。定職に就くことができず妻に養われているという他者の軽蔑対象になりそうな自分の現状を意識すればするほど、馬鹿にされたくないという意図が強まり、言語の中に如実に現れてくる。なお、日記中に見られる三人称を用いた自己言及は「客体化」であると言えるが、ここでは Joseph の「他者に馬鹿にされたくない」という意識の変遷をたどることで、他者の視線を内在化する過程に注目したい。先に引用した場面において漠然と読み取ることができた他者の視線への意識は、次の引用部においてより明確に表れている。

It would be difficult for anyone else to know how this affected me, since no one could understand as well as I the nature of my plan, its rigidity, the extent to which I depended on it. *Foolish or not, it had answered my need. The plan could be despised; my need could not be.*
(38, 強調は引用者)

引用の斜体部分において、Joseph は自分の惨めな現状を見れば誰しものが抱くであろう感情 (“Foolish”) をあらかじめ予測し、それを先取りするかのよう
に自分の言葉の中に組み込んで発話している。ここでは Joseph 自身の自己認識
と他者の声とが並列して提示され、せめぎあっているが、予測される他者
の声は徐々に Joseph 自身の声に浸透し、内包されていく。物語が進むにつれ
て他者の声のアクセントは次第に強まり、次に引用する場面においてはつい
に、Joseph の潜在的な恐れが妻 Iva の声となって引用符付きで割り込んでい
る。

She gasps, “*Oh, the fool!*” when I go into the hall with a cross pull at the door. I suppose she means Vanaker; but may she not also mean me?
(104, 強調は引用者)

斜体部分 (“*Oh, the fool!*”) がそれに該当する。他者の声が明確な形で割り込
むことによって、Joseph 自身の声は寸断されてしまったように見える。しか
し、この言葉は実際には Iva が隣人である Vanaker に向けて言った言葉を
Joseph が自分に向けられたものかもしれないと邪推しているものである。簡
潔に言えば、Joseph は自己内部にあった潜在的な恐れと Iva の言葉との呼応
関係を感じ取り、それを自分の言葉に組み込むことによって自らの現状に直
面しようとしているのだ。“*Oh, the fool!*”という台詞を介して、Joseph の潜在
的な自己認識と他者 (Iva) の意識が呼応し、Joseph の内部で融合していると
言える。

これまで見てきたように、Joseph は他者の声を自己外部に隔離するよりも、
自己内部に包含する柔軟性を備えており、他者の客観的な視点を主体的な意

識として感じなおすことで内在化させている。Joseph が二度にわたって対話することになる分身は、上に引用した場面（Joseph が Iva の声を内在化した場面）とほぼ同時期に出現している。第二次世界大戦中の停滞した雰囲気と共有した作品の中で、*Dangling Man* と同じく分身表象が見られるものとしては例えば Truman Capote の短編“Miriam”（1945）がある³。“Miriam”に見られる分身が主体の唯一性を脅かすものとして描かれていることと比較したとき、Joseph の分身が主体に寄り添うものとしての側面を持っていることがやや目立つのは、主体としての Joseph が潜在的には拡張と包含を志向する性質を備えているためであろう。この点において、Joseph は単声的ではなく多声的な主体であると言える。John Clayton は *Dangling Man* について、“there is no organized plot, no dramatic interaction among characters working toward a resolution: the problems and their resolution remain internal.”（Clayton 57）と述べているが、「寄り添う分身」を生み出すような視点は実際の他者との劇的かつ有機的な相克によって生じるものである⁴。

第一節において見てきたのは、他者の視点を濾過して自己内部に取り込むことによって、それらを主体的な意識として感じなおす動き、つまり、内在化した非我の感覚に応じて自己を再編集する動きである。このような動きは、

³ “Miriam”において、少女 Miriam は Mrs. Miller の分身であると考えられ、Mrs. Miller が Miriam の出現によって失ったのは彼女自身のアイデンティティであったと語られている（“Miriam” 12）。このことから、Miriam は自己外部に出現し、主体の唯一性を脅かす分身であると言える。一方、*Dangling Man* における分身は、Joseph とひとつのオレンジをわけあって食べたり、ブランケットを掛けて Joseph をなだめたりしており、対話者として自己内部に出現した主体に寄り添う分身であると言える。

⁴ 片淵悦久は Joseph と分身（すなわち「擬似的な他者」）との対話を Bakhtin の理論を援用することによって分析し、Joseph にとって必要なのは「閉鎖的で単声的な視点を解体し、その結果として複数の異なるものの見方が共存する状況を生み出す」（片淵 42）ことであると鋭く指摘している。しかし、本稿ではむしろ分身が出現するにいたるまでの Joseph の視点に注目することによって、擬似的な他者ではなく実際に Joseph を取り巻く他者との相克を明らかにしたい。

後の作品においてはさらに身体的な次元でも顕著に見られる。例えば、短編“Leaving the Yellow House”(1958)の主人公 Hattie は怪我をして輸血を余儀なくされたことを機に自分の置かれた状況や生活の危機的状況について考え始める。その萌芽となるような動きが *Dangling Man* にも見られる。以下に引用するのは、Joseph の友人 Minna Servatius によって開かれたパーティーからの場面である。

The rest of us crowded into the study and, in embarrassed silence, stood looking down at Minna on the couch. I could not believe at first that she was not pretending; *the change seemed too great*. I was soon convinced that this was real enough. She lay loosely outstretched, a strong light behind her turned against the wall. One of her sandals had come unfastened and swung away from her heel. Her hands lay open at her sides. One noticed how narrow and bony her wrists were and the mole between two branches of a vein on her forearm. But, for all the width of her hips, and the feminine prominences, her knees under the dress, her bosom, the meeting of her throat and collarbones, *she looked less specifically like a woman than a more generalized human being* and a sad one, at that. This view of her affected me greatly. (34, 強調は引用者)

古くからのなじみの面々が集う Servatius 家のパーティーにおいて、主催者 Minna は悪酔いし、かつての恋人である Morris Abt に自分に催眠術をかけてくれるよう頼む。Servatius 家は「何時間も、何日も、何週間も前からつぶさに予測できる」(26)と描写されるほど Joseph にとっては慣れ親しまれた場所であるが、彼はそこで意表をつくような光景、つまり抵抗する力を失い麻痺した Minna の姿を目の当たりにすることになる。引用した箇所においては、Minna の身体の印象が大きく変化したことが描かれており、ここで彼女の身体は性差という境界を越えた変容を見せ、「一人の女性というよりはもっと一般化された存在、それも悲哀に満ちた人類一般の姿」であると描写されてい

る。このことから、Joseph は麻痺した Minna の身体に、自分を含む同時代の人類の姿を見て取っていると考えられる。麻痺状態が戦時下の停滞した雰囲気を示す比喻であることは容易に想像できる。外的な圧力によって無力化された Minna が、抵抗することもままならず Abt の言いなりになる状態は、徴兵の保留という自分自身ではどうすることもできない状況下でただ無味乾燥に日々をやり過ごすほかない Joseph の現状と呼応するものがあるのだ。Joseph は Minna の身体を見ると同時に感じていると言える。

さらに重要なことに、同じ場面において Joseph は Minna の強いられた所作にも自身との呼応関係を感じ取っていると考えられる。催眠術をかけられているあいだ Minna が示している一連の所作は、彼女自身の感覚に応じたものではなく、感じるように強いられた感覚に応じたものである。

He [Abt] began by making her feel cold. “Someone must have turned off the heat. I’m chilled. Don’t you feel cold, too? You look cold. It is cold here; it’s almost freezing.” And she gasped a little and drew up her legs. He went on to tell her that when he pinched her hand she would feel no pain, and so she felt none, though the skin, where he had twisted it, remained white long afterwards. He deprived her of the power to move her arm and then ordered her to raise it. (34)

Minna は Abt に指示されたことをあたかも自分自身が感じたことであるかのように振舞うのだ。「寒いのではないか」と訊ねられると、実際には寒さを感じていないにもかかわらず両脚を縮こめたり、その一方では Abt に腕をつねられて痛みを感じているはずであるのにまったく何も感じていないかのように振舞ったりしている。ここに描かれているのは感情と行為の乖離であり、表出した Minna の行為には彼女自身の内的動機が伴っていない。「身を縮める」という所作は「寒さ」という感覚の結果生じるものであり、その仕草を見ると誰しものが、動作主が寒がっていることを理解するような紋切り型の行為である。すなわち、Minna はある感情/感覚を抱いた結果として一般的に予測されるシンボリックな所作を、内的動機を伴わずに形だけ示しているに過

ぎない。非我の感覚によって解体されてしまった状態が、麻痺状態として身体上に可視化しているのだ。

これと同種の感情と行為の乖離こそがまさに Joseph の憂鬱を誘発した要因である。2月5日付けの日記の中で、彼は以前住んでいた部屋からの退去を余儀なくされてしまったエピソードを回想している。平素の彼は「穏やか(“even-tempered”）」(108)で、他者と故意に言い争うような性格ではなかったのだが、家主と不穏当な喧嘩をしてしまったのだ。ここで、Joseph は自分の「現在の不穏な精神状態(“present ill temper”）」(105) 自分の不毛な状況に対する不満足や世界に対する違和 が『自分らしくない』行為(108)の結果もたらされたものであるとの認識を吐露している。言い換えれば、Joseph が自分自身や他者に対して抱いている違和感の根本的な引き金となったのは、彼が家主と喧嘩した際に感じた自分自身に対するよそよそしさなのである。このような感覚においては「見る主体としての自己」と「見られる客体としての自己」は決定的に隔たっている。第一節で見たような、非我の感覚によって解体される主体のイメージがここにおいても生起している。「見られる客体としての自己」が常に他者の存在を前提としている以上、この場面において Joseph が感じている自己自身に対する距離はそのまま他者に対して感じる距離を反映していると考えられる。そのために、Joseph は周囲から孤立しているように感じているのだ。

では、一体どうしたらこのような憂鬱や孤立感から解放されるのだろうか。その方法のひとつとして提示されているのは芸術における創造行為である。次に引用する箇所からも明らかであるように、孤独感に苛まれて無味乾燥に日々を過ごす一方で、Joseph は創造性を保ちたいと願っており、芸術を創造する行為の代替的手段を模索している。

He [Pearl] is telling me what he feels: that he has escaped a trap. That really is a victory to celebrate. I am fascinated by it, and a little jealous. He can maintain himself. Is it because he is an artist? I believe it is. Those acts of the imagination save him. But what about me? I have no talent for that sort of thing. My talent, if I have one at all, is for being a

citizen, or what is today called, most apologetically, a good man. Is there some sort of personal effort I can substitute for the imagination?
(64)

Joseph の友人の一人であり、画家の John Pearl は広告の仕事をしているが、そういったメディアの仕事は「子供じみて」(64)いて、「本当に価値のある仕事は想像力を使う仕事だけである」(64)と主張している。Joseph は Pearl の考えに魅力を感じながらも、自分自身は芸術的な才能を持ち合わせていないためジレンマに陥っているのだ⁵。さらに Joseph は、芸術家同士の精神的な結びつきを理想的なものであるとして、画家としての才能を持っている Pearl を羨ましく思っている。

There he [Pearl] is in New York, painting; and in spite of the calamity, the lies and moral buggery, the odium, the detritus of wrong and sorrow dropped on every heart, in spite of these, he can keep a measure of cleanliness and freedom. *Besides, those acts of the imagination are in the strictest sense not personal. Through them he is connected with the best part of mankind. He feels this and he can never be isolated, left aside. He has a community.* I have this six-sided box. And goodness is achieved not in a vacuum, but in the company of other men, attended by love. I, in this room, separate, alienated, distrustful, find in my purpose not an open world, but a closed, hopeless jail. My perspectives end in the walls. Nothing of the future comes to me. Only the past, in its shabbiness and innocence. Some men seem to know exactly where their opportunities lie; they break prisons and cross whole Siberias to pursue them. *One room holds me.* (65, 強調は引用者)

⁵ *Dangling Man* においては芸術家同士の精神的な結びつきが理想として挙げられているにもかかわらず、芸術的な才能を持たない一般的な人間が主人公として据えられている。Jonathan Wilson もこの点に言及し、日記を書くことを Joseph による芸術創造の代替行為としてとらえている (Wilson 45-46)。

James Atlas はこの箇所を引用し、特定の空間（部屋）と想像力との呼応関係を示唆しているが（Atlas 96）、序論において確認したように、特定の空間（部屋）は Bellow 作品の中ではしばしば人間の身体とも呼応している。したがって、部屋のイメージを媒介として人間の身体と想像力との呼応関係を読み取ることができる。このことから、人間の身体の有限性に意識的であった Bellow が、その有限性の中で可能な限り創造的に生きる手段として、身体感覚を通じたアプローチを作品中に描いていると考えることができる。麻痺状態が、非我の感覚によって解体された状態で、身体上に可視化した憂鬱であるならば、意識的な身体的所作を通じて憂鬱から脱却する手段は理にかなったものである。また、ここで述べられている「芸術家の創造行為は厳密に言うところ個人のものではなく、他者とのつながりを生み出すものである」という考えは、以下に引用する Leo Tolstoy の有名な「芸術は感染する」という論に符合している⁶。

The chief peculiarity of this feeling [the feeling produced by art] is that the perceiver merges with the artist to such a degree that it seems to him that the perceived object has been made, not by someone else, but by himself, and that everything expressed by the object is exactly what he has long been wanting to express. The effect of the true work of art is to abolish in the consciousness of the perceiver the distinction between himself and the artist, and not only between himself and the artist, but also between himself and all who perceive the same work of art. It is this liberation of the person from his isolation from others, from his loneliness, this merging of the person with others, that constitutes the chief attractive force and property of art. (Tolstoy 121)

⁶ ハイスクール時代に Russian literary society に所属するなど、Bellow はロシア文学に親しんでいた。また、例えばノーベル賞受賞時のスピーチなどでも Tolstoy に好意的な発言をしている。そのため、この場面で Joseph が述べる芸術観と Tolstoy の芸術論との類似には意識的であったと考えられる。

Tolstoy は Joseph と同じように、真の芸術行為が個々の人間同士を隔てる境界を取り払うものであり、「人間を他者から孤立した状態から解放する」ものであると認識している。反対に、「まやかしの芸術 (“artistic counterfeit”）」とは「別の芸術家が味わった心持を、別の芸術家があらかず通りにあらかずこと」(Tolstoy 98) である。*Dangling Man* において催眠術にかけられた Minna が示したような、内的動機を伴わない紋切り型の所作はそういった「まやかしの芸術」に該当すると考えられる。乖離し、断絶してしまった感情と行為の回路を修復することが、芸術的な才能を持たない Joseph にとって、「見る主体としての自己」と「見られる客体としての自己」との隔たり（ひいては、自己と他者との隔たり）をなくし、内的な創造性を呼び覚ます代替的手段となりうるのではないか。

Dangling Man は自ら戦地に赴く決心をした Joseph の、以下のような奇妙な独白をもって終わる。

I am no longer to be held accountable for myself; I am grateful for that.
I am in other hands, relieved of self-determination, freedom canceled.
Hurray for regular hours!
And for the supervision of the spirit!
Long live regimentation! (143)

この結末部分は先行研究において多くの批評家たちの注目を集めてきたが、その解釈は概ねふたつに分けられるように思う。つまり、Joseph の敗北宣言と解釈するか、自己のおかれた状況を客体化・戯画化するアイロニカルな態度と解釈するかのいずれかである⁷。Bellow 自身は David Bazelon に宛てた

⁷ 例えば Gilbert Porter は、“This conclusion is, of course, ironic. Whatever joy there is in it is supplied by relief. He does not praise regimentation, which he knows nothing about, or regular hours, though Goethe recommends them; he celebrates instead the end of his long, painful isolation, the return to community experience, however imperfect, and the bare possibility that he may indeed find answers to his questions in a new way of life.” (Porter 26-27) と述べている。一方で、Eberhard Alsen は、この結末は Joseph の “both physical and spiritual suicide” (Alsen 27) であるとしている。

1944年3月20日付けの手紙の中で、結末部分は Joseph の置かれた苦境についての皮肉であって、降伏を促すものではないと述べており (*Letters* 36)。本稿ではその意見に同調したい。しかし、自己の置かれた状況を戯画化するという行為は、アウトサイダーとしての客観的な視点を要請するものである。それだけでは「見る主体としての自己」と「見られる客体としての自己」は隔たったままであり、Joseph の憂鬱の根本的な要因 自分自身に対するよそよそしさを完全に解決したとは言えない。それどころか、自己を客体化しようとする試みは、しばしば失敗に終わっていることに留意せねばなるまい。例えば、3月22日付けの日記で Joseph は、暦（客観的時間）に従って薄着を着て出かけることを決意しているが、その試みは彼を寒さという主観的な身体感覚へと引き戻すだけであった。また、作品終盤で Vanaker に対して積もりに積もった怒りを露わにする場面が見られる。冷静な態度は熱い感情の高ぶりによって中断されるのである。その際に Iva が Joseph に言う「部屋に戻ったほうがいい」(136) という忠告は、Joseph に均質な型（世間から正常とみられる型）に戻るよう促す言葉であるとも解釈できる。作品中に、Joseph の問題の解決の可能性がほのめかされているとするならば、それは以下に引用する場面においてである。

The room, delusively, dwindled and became a tiny square, swiftly drawn back, myself and all the objects in it growing smaller. This was not a mere visual trick. I understood it to be a revelation of the ephemeral agreements by which we live and pace ourselves. I looked around at the restored walls. This place which I avoided ordinarily, had great personal significance for me. (142)

すでに言及したように、Joseph が自己自身に対する距離を感じ始めたのは以前住んでいた部屋を追い出された時のことだった。それとは対照的に、物語終盤において Joseph は自らの意志で部屋を出ていくことを決心する。それによって、断絶していた感情と行為の回路は束の間のことであったも修復されたと考えられ、その結果、上に引用したようなエピファニーがやはり「束

の間 (“ephemeral”）」のことはあるが、もたらされるのである。閉鎖された空間(部屋)は死の状態、あるいは滞った想像力を示しているのであった。それならば、自らの意志で部屋から出るという行為は型からの解放を示唆しており、部屋が歪んで見えるという現象は身体感覚の更新とそれによる想像力の解放を促すエピソードであると考えられる。これまで述べてきた論に従うと、この場面において Joseph が部屋(自分の身体や想像力)を見るまなざしは「単なる視覚的なトリック (“a mere visual trick”）」ではない、つまり客体化のような視点の角度転換などではない啓示なのである。Dangling Man の結末部分は知性によるアプローチだけではなく、そこに感覚によるアプローチが加わってはじめて達成される自己解放の可能性を描いているのだ。

結

Saul Bellow は他者の視線に敏感な作家だった。それらは主体を解体するべく容赦なく浸透してくるものとしての側面を持っており、とりわけ Bellow が「ユダヤ系作家」の枠組みにとどまらず、アメリカの文壇に認められる作家になることを目指す上で厳しく肌に差し迫って感じられるものであった。そういった他者の視線へのオブセッションは、作家としてのキャリアの初期においては特に切実なものであったと考えられ、処女小説 Dangling Man の主人公 Joseph の視点にも投影されている。自己を解体するべく侵入してくる他者の視線にさらされながら創作を続けた Bellow の葛藤は、非我の感覚に解体される恐怖を創造的な気分へと昇華させることによって個人の尊厳の回復を試みる Joseph の姿に重ねられている。創造性を保つ上で、Joseph は自己の輪郭に容赦なく浸透してくる他者の視線を自己外部に隔離するのではなく、内在化することによって自分の現状に直面しようとする。いわば、痛みを正視させる視点の力が働いているのだ。

Joseph は憂鬱や孤立感に苛まれながらも他者とのつながりを求めており、それを可能にする芸術的な才能を持ち合わせていないことを嘆いている。しかしながら本稿においては、乖離した感情と行為の回路を修復しようとする動きが Joseph にとって芸術創造の代替行為として「見る主体としての自己」

と「見られる客体としての自己」との距離を埋め合わせる（ひいては、自己と他者との境界を取り払う）働きを持っていることを分析し、小説の終盤において、そういった身体感覚を通じた自己解放の成功がほのめかされていることを明らかにした。非我的感覚によって解体される恐怖を創造的な気分へと昇華させ、個人の尊厳を保ちつつ他者とのつながりの中で生きていく方法として、意識的な身体的所作が提示されているのだ。紋切り型の所作を批判し、“conscious technique”を通じて“unconscious creativeness”（Stanislavski 50）へ到達する手段を模索したロシアの演出家 Konstantin Stanislavski の名が *Henderson the Rain King*（1959）に見られることから、本稿において論じたような身体的所作を通じた自己解放については 40～50 年代の Bellow 作品を広く射程に入れてさらに考察する必要があるが、それについては次の機会に譲りたい。

引用文献

- Alsen, Eberhard. *Romantic Postmodernism in American Fiction*. Amsterdam-Atlanta, GA: Rodopi B.V., 1996.
- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. New York: Random House, 2000.
- Bakhtin, Mikhail. *Problems of Dostoevsky's Poetics*. Ed. and trans. Caryl Emerson. Minneapolis: U of Minnesota P, 1984.
- Bellow, Saul. *Dangling Man*. New York: Penguin, 2006.
- . *Henderson the Rain King*. New York: Penguin, 1996.
- . *Humboldt's Gift*. New York: Penguin, 2008.
- . “Leaving the Yellow House.” *Mosby's Memoirs and Other Stories*. New York: Penguin, 1996.
- . “The Nobel Lecture.” *American Scholar* 46 (1977): 316-25.
- . *Saul Bellow: Letters*. Ed. Benjamin Taylor. New York: Viking, 2010.
- Capote, Truman. “Miriam.” *A Capote Reader*. London: Penguin, 2002. 3-12.
- Clayton, John J. *Saul Bellow: In Defense of Man*. 2nd. ed. Bloomington: Indiana UP, 1975.
- James, William. *The Principles of Psychology*. Vol. 1. New York: Dover, 1950.

片淵悦久 『ソール・ペローの物語意識』 京都, 晃洋書房, 2007 年。

Porter, M. Gilbert. *Whence the Power?: The Artistry and Humanity of Saul Bellow*. Columbia: U of Missouri P, 1974.

Stanislavski, Konstantin. *An Actor Prepares*. Trans. Elizabeth Reynolds Hapgood. London: Methuen, 2008.

Tolstoy, Leo. *What Is Art?* Trans. Richard Pevear and Larissa Volokhonsky. New York: Penguin, 1995.

Wilson, Jonathan. *On Bellow's Planet: Readings from the Dark Side*. Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1985.